

第31期第7回仙台市図書館協議会会議録

- ◎ 会議の日時・場所 令和6年8月20日（火）10時00分～12時00分
仙台市役所本庁舎8階 第4委員会室
- ◎ 出席委員の氏名 児玉忠委員、小林直之委員、齋藤千里委員、
佐藤幸雄委員、杉山秀子委員、高橋由臣委員、
竹内透史委員、宮崎佳子委員、矢嶋哲也委員、
渡辺祥子委員、渡邊千恵子委員
- ◎ 事務局職員氏名 市民図書館長 樋口千恵、市民図書館副館長 伊勢貴
広瀬図書館長 菊池雅人、宮城野図書館長 岩淵明広
榴岡図書館長 柴田雅子、若林図書館長 村上佳子
太白図書館長 湯村倫子、泉図書館長 那須野昌之
市民図書館企画運営係長 宍戸信宏
市民図書館奉仕整理係長 吾妻由美
市民図書館奉仕整理係主査 浅野佑一

◎ 会議の概要

1 開 会

2 挨拶

館長挨拶

会長挨拶

3 会議録署名委員指名

会長より宮崎佳子委員を指名

4 報告事項

（1）令和5年度仙台市図書館利用状況などについて

（市民図書館副館長 報告）

資料1に基づき報告

[委員からの質問・意見など]

矢嶋哲也委員 資料1の裏面の館別利用状況によれば、太白図書館を除くと、予約受付件数が、令和3年度、令和4年度、令和5年度の順に少しずつ下がっているが、その要因はわかるか。

事務局 インターネットの予約による件数が増えているので、そういったところが影響していると考えられる。

矢嶋哲也委員 インターネット予約の件数を合わせればそれほど変わらないか。

事務局 大きく変動したとは考えていない。むしろ全体としては微増と捉えている。予約受付件数の合計が一番右下にあるが、令和4年度が92万件に対して、令和5年度は93万5,000

件余りと増えている。太白図書館は非常にアクセスが良いため来館しての窓口での予約件数は変わらず、他館ではインターネットによる予約者が多くなったのではないかと思う。

矢嶋哲也委員 承知した。

議長 電子図書館の貸出数も年々、増加していたが、令和5年度が令和4年度に比べて減少しているのは理由があるのか。

事務局 電子図書館は令和3年11月から開始したが、コンテンツは2種類あり、有効期間や貸出回数の制限がない買い切り型と、2年間または貸出回数が52回までの制限付きの、期間・回数限定型のものがある。令和5年度に制限付き期間・回数限定型の期限が到来したことにより、一旦、コンテンツが減少し、貸出数もそれに比例して減少した。

議長 資料1の1ページ目、個人登録者数について、この数が若干増えたという話があった。他都市と単純に比較することはできないが、100万都市の仙台で8万6,000人という人数は、どのように判断したらよいか。参考になるデータがあったら教えてほしい。

事務局 毎年開催している政令指定都市立図書館長会議の資料に登録者数の記載があり、100人当たりで計算すると、仙台市の登録者数は下から2番目となっている。この人数の出し方は、各都市によって違うため単純には比較できないが、本市の場合、まず利用登録している方で有効期限内であり、かつ当該年度（令和5年度）に貸出実績のある方を個人登録者数としている。他の自治体では、一旦、利用登録をすると、例えば、その後他の自治体へ転出したとしても、登録者として計上されているところもある。一概には言えないが、本市の人口に対して多いかと言われると、決して多いとは言えない現状であるという認識だ。

議長 図書館がこれからもよい状態で運営されるためには、もう少し活性化していくことが大事だと思うが、それぞれの図書館では、今よりも少し利用者を受け入れるキャパシティはあるのか、それとも現状でいっぱいなのか。その実感というのが私たちには分からないので、各館でどのようにとらえているのか伺いたい。

事務局 (泉図書館長) マンパワーも含め、更なる利用者を受け入れる余地はあると捉えている。サービスにもよるが、まずは利用していただけないと始まらない。よって、泉図書館としてどのような取組みを行っているのかを市民の方々に広く周知し、知っていただくことが大事だと思う。利用者を増やすためにはもっとPRをしていく必要があると感じている。この点を今後、強化していきたいと考えている。

事務局 (太白図書館長) 太白図書館は大勢の方にご利用いただいている。さらに現在は、若林図書館の休館によって若林図書館を利用していた方にも来館していただいております、本当にスーパーマーケットのような感じで館内は大変混み合っている。ただし、ふだん来館されない方たちの利用は、もう少し増えるといいと思っている。しかし、館内業務が忙し過ぎて、アウトリーチのほう弱くなっているため、分室やサービススポットでの利用や館外でのサービスに力を入れる必要があると感じている。

事務局 (若林図書館長) 若林図書館は現在、休館中で、イレギュラーな状況だが、通常は若林区の人口から見ると登録者数は7.6%となっている。1割くらいの登録率かと思ったが、それより少し

低かった。地域によって、低いところ高いところがあるが、まだまだ利用していただけない方がたくさんいると実感している。若林区は車以外で図書館へ来るには非常に交通のアクセスが悪いので、それを補うために何ができるかと考えると、出前事業やアウトリーチが考えられる。さらに、学校図書館を活用した支援などができたらと考えている。

事務局 榴岡図書館は市内で一番規模が小さい図書館であるため、どうしても館内で閲覧をしていただく場所が狭く限界を感じている。ただ、利用の仕方が多様化してきているなど感じていることもあり、それぞれのニーズに合わせて対応していく必要があると思っている。

また、地域のイベントなどに参加すると、図書館の場所を初めて知ったという声もたくさんいただくので、地域連携、学校連携も含めて今後もアウトリーチに力を入れていきたい。

事務局 宮城野図書館は、直営館（市民、太白、泉、宮城野）の中で一番職員数が少ない。これは施設がワンフロアのつくりで、異なる階に職員を配置する必要がないことによる。土日の午前中など忙しいときには、内勤の職員も含めて対応しているが現在の職員数では手が回らないという状況にもなる。先日、夏のスペシャルおはなし会として「ちょっとこわいおはなし会」を開催した際、多くの方に足を運んでいただいた。大変うれしいと思う反面、おはなしのへやから人があふれる状況となった。現職員体制のままで、日々、そのような状況となるとイベント対応もなかなか難しい。宮城野図書館のキャパシティと現在の職員数でどう館を運営していくかというのは課題であると思っている。

事務局 宮城総合支所保健福祉課が毎月開催している、3か月から8か月の子どもの対象にした「あかちゃんくらぶ」で図書館の紹介や簡単な読み聞かせをする機会が年に3回ある。そこに集まってくる保護者で図書館を利用したことがない方は、毎回7、8割いる。つまり、図書館を利用したことがあるという保護者は少ない。小さい頃、図書館を利用した経験がないと、図書館が利用できるということを知らないまま大きくなる。仙台市図書館振興計画の「方向性2」に掲げているが、小さい時期から図書館に接するという機会をつくるということは本当に大事なことだと思う。また、広瀬図書館は宮城総合支所と近接していることもあり、市役所の職員の利用がどれくらいなのか気になるころである。

議長 私たち委員はもっと前にこのことを伺っておけばよかったかもしれないと、そんな気持ちがあった。それぞれの館の事情などもあるが、やはり根本的なところで図書館の利用について掘り下げていかなければいけないと思った。

個人登録者数の約8万人が妥当なのかということから各館に具体的な事情を伺い、日によって、時間によって忙しいときはスーパーマーケットのような混雑具合だという館もあったが、基本的にはもう少し利用者数、個人登録者数を上げていくことは必要かと思う。委員の皆様方でアイディアなどあるか。

竹内透史委員 宮城県図書館では、転出した方なども登録人数として積み重ねている。

令和5年度は4,000人程度が新規登録しており、毎年、だいたい4,000人ぐらいで推移している。図書館に来ない方をどうやって呼び寄せるかという話が先ほどから出てい

るが、宮城県図書館で新規登録者が一番多かったのは、令和3年度で4,300人。令和5年度はかなり様々な取組みを行い、来館者が多い印象ではあったが4,000人。登録者数が伸びたわけではなかった。令和3年はまさにコロナ禍であり、このときの登録者数が一番多かった。なぜかと考えると、様々な制約があり本を読むしかなかったとか、そういう程度の話になってくる。つまり本を読むという目的がないと登録はしてくれない。そうすると本を読む習慣であるとか、小さいときから図書館を利用する習慣とか、そのような根本的な問題にどうしても行きついてしまう。各館長の話のを伺って、結論としては1つの図書館が大きな取組みを行っていくというよりは、長い期間をかけて本を読む習慣づけの積み重ねしかないように思う。それは宮城県、仙台市が図書館というものをどう考えるのかにつながっていつてしまうと思う。

宮崎佳子委員 前任校が秋保地区の湯元小学校なのだが、太白図書館にも広瀬図書館にも公共交通機関で行くのは難しい立地だった。それでも学校が移動図書館のステーションになっていたので、国語の授業で移動図書館の探検をさせていただいた。そのときに、全学年の子どもたちに利用者カードの登録を呼びかけ、児童の9割以上は持っている状態となった。同時に利用者カードを持っていない保護者にも呼びかけ、お子さんと一緒に本を読めるように利用者カードを作ってくださいとお願いした。小規模の学校ではあったが、移動図書館を利用する子どもは増え、新規登録者数を上向きにすることはできた。

利用者カードを持つ意義というのは、今だけではなくて、長いスパンで考えたときに、小学校から中学校、中学校から高校、大学へと進学し、やがて街に出ていき、自分が通う学校の近くの図書館を利用する、社会人になってもふと立ち寄って図書館を利用する、そのようなことのきっかけになるので、どこできっかけをつくるか、それはなるべく早いほうがいいと思う。

議 長 事務局とも学校でカードをつくることのできないのかという話をしたが、個人情報の問題や保護者の許可であるとか、そういったものがハードルになっているということだった。宮崎委員の前任校での取組みを他の学校でもできるようにするためには、そのハードルをどうやって超えていったらいいのかと考える。個人情報の問題があるし、保護者の許可も難しい、で終わらない何か方策を考えていければいいと思った。

齋藤千里委員 通常、学校にブックトークに行くときには必ず図書館から本を持って行き、「この本は図書館でも借りられるよ、図書館にもいろんな本があるから」と呼びかけることを付け足して読書推進につなげている。

以前、市内の中心部にある中学校に行ったとき、「図書館ってどこにあるの?」と言った子がいた。「こんな街の中心に住んでいるのなら、近いところだったら市民図書館がメディアテークの中にあるよ」と教えたら、「本をただで借りられるの?」と聞かれた。私たちは、図書館で資料を無料で借りられることは当たり前だと思っているが、それを知らない子もいるということが衝撃だった。小学校2年生で図書館に見学に行き、利用者カードをつくるという取組みがあると思っていたが、それはそのときだけの出来事になってしまっているようなので、継続的な取組みがあったほうがいいと感じた。

それから、学校で読み聞かせをしているが、歴代の校長先生に「図書館に行きたくて

も小さい子どもは1人では行けない。ですから学校図書館を充実させてください。」とお願いしている。低学年の児童は本当に1人で図書館に行けないので、子どもだけではなくて保護者へのアピールも利用人数の増加につながると思った。

副 会 長 大人にとって課題になっていることを、子どもに早いうちから身につけさせようという議論は世の中にたくさんある。そういう流れの中にあるので、〇〇教育というのを次々に足し算されてしまって学校現場は大きく負担を感じている面があるかもしれないが、費用対効果を考えると、図書館を生涯利用するきっかけを学校がつくるというのは、効果が高い方だと思う。前回、図書館がモノの管理から調べ物のコトのセンターになって、そして今、人と人が集まるコミュニティの場所になるという話をしたが、学校をあげて子どもたちを連れてくるというのではなく、図書館が居場所になるというような、例えば夏休みの子どもたちの居場所になるようなイメージが1つアイデアとしてあると思う。

ただ、何でも図書館にと言われても職員ができることは限界があるので難しいが、一定の年齢以上の子どもたちにとっては、豊かな居場所になると思う。各図書館それぞれに立地、地域特性、職員数の問題などがあるので、同じようにはできないと思っている。要するに、コミュニティの場所にするためには、その図書館のコミュニティや地域はどのようなのか、子どもたちが行きやすい、行きにくいも含めた意味での立地も踏まえて、それぞれの館に合わせた取組みを行うべきだ。各館の条件が異なるため、一律に取り組むと問題が生じると思う。

佐藤幸雄委員 最近、勉強のために熊本市にある「こども本の森 熊本」に行ってきた。安藤忠雄氏が設計した建物で、子どもたちに本を読んでほしいということで、寄付金でつくられたそうだ。東北でいうと遠野市にも、東日本大震災の復興のためにと安藤忠雄氏から声かけがあってつくられた図書館がある。こういった民間の方々の活力はすごいと思った。「こども本の森 熊本」は、熊本県出身の俳優宮崎美子さんがボランティアで名誉館長に就任している。「こども本の森」は予約制だが、子どもを連れた家族や熊本県外からの来館者も多く、予約がいっぱい2か月待ちというような状況だそうだ。ここに来ると子どもの本がたくさんあって、芸術的でモダンなすばらしい建物も見られるうえに、熊本県立図書館に隣接しており、県立図書館との事業連携がされていることもすばらしいと感じた。このような事業連携も、先ほどの本に触れる機会の一助にはなるのではないかと思った。子どもだけでなく大人も本に触れるきっかけがそこでできる。私自身、ワクワクして、このような施設なら来たくなると思った。非常に衝撃を受けたので、報告をさせていただいた。

議 長 ぜひ伺ってみたい。仙台市として、本を通してどのようなコミュニティを築くことができるのか、ありがたい姿はどのようなのかといったビジョンを、仙台市全体として持てるとういと思った。話は広がったが、この辺でこの報告事項のところは締めたいと思う。

5 協議事項

(1) 令和5年度仙台市図書館事業報告書(案)について

資料2に基づき説明

- 議 長 非常に多岐にわたる方向性と施策に基づいて様々な活動を行っているということで頭が下がる思いだが、質問や意見はあるか。資料の分量が多いため、発言の際は、資料の何ページのどの方向性、施策に関するものか示してほしい。
- 竹内透史委員 方向性3で2点ほど質問する。1点目は21ページだが、移動図書館のアウトリーチ型事業のところ、「年齢や障害の有無」と書いてある。障害がある方についてどのようなサービスの工夫があるのかを伺いたい。
- 事務局 2点目は、16ページの外国語資料について、外国語の一般洋書の受入数が令和4年度13冊だったが、令和5年度は10倍になっている。購入にあたり何か工夫などあれば教えていただきたい。
- 事務局 1点目の移動図書館について、障害がある方に対してどのような工夫をしているかについては、新しく更新した「わかくさ号」は、絵本「くまのがっこう」のジャッキーの可愛らしい外装のほかに、車椅子の方も乗り降りできるリフト付きの仕様になっている。更新前の移動図書館車は車椅子の方は中に入っていくのが難しいところがあった。今後もこの機能を活用して、様々なアウトリーチ事業に活かしていきたいと考えている。
- 事務局 2点目の外国語資料の一般洋書の受入れ増については、日本の資料と比べると、どうしても高額であるということと、利用が少ないということでこれまで選定が難しかった。しかし、新しい本がないと魅力的な書架がつかれないため、昨年度は思い切って、定番の洋書のセットを選定して購入した。利用が増えるように積極的に購入したので点数はかなり増えた。
- 竹内透史委員 外国人の方が利用している印象はあるか。また、購入した資料は英語か。
- 事務局 今年度は外国人の方向けの図書館ツアーを企画して、そこで本の紹介なども行った。これから少しずつ利用が増えることを期待している。なお、購入した資料はほとんどが英語の書籍である。
- 高橋由臣委員 方向性2の7ページ目について、未就学児が利用する保育園、幼稚園や今から子育てに入る方向けに病院などへ図書館が出向いた実績はあるか。
- 事務局 保育園や病院などに出向くサービスは、どこの保育園や病院に行くかをどのように決めるか、特に病院は外部からの感染のリスク等もあるため受け入れ側もチェックが厳しいなど、整理しなければならないことが多く、残念ながら実施していない。現在行っている未就学児に対するサービスとしては、保育園への除籍本の無償譲渡がある。
- 高橋由臣委員 意識の高い保護者の方やこれから子育てに向けて準備される方々は、自ら様々な情報を得ていろいろな場所に出向くだろうが、全体的に子どもが小さいうちから図書館を利用していただくとか、保護者にその意識を向けてもらうためには、自ら情報を取りにくい方への働きかけの仕方を考える段階にあると思った。
- 事務局 保育園などに出向くのは、なかなか難しいという話はしたが、私どもも対応を工夫し

ている。例えば幼稚園や保育園あるいは児童館などには、子ども読書支援パックとして読み聞かせができる本のセット貸出をしており、それを利用しているところでは、保育士さんたちが子どもたちに読み聞かせをしてくれているかと思う。

一方、私どものおはなし会などに来てくださる方は普段から本を読む習慣が身につけている方々かと思うので、以前も紹介したが、例えばイベントの際に、本を読むこととは一見、関係ない栄養士による栄養食事相談コーナーを設置して、そこに、直接、本には関心がないが育児に関しては悩みがあるというような方々に来ていただき、そばで子ども達が絵本に触れて楽しそうにしている姿が目に入るようにし、関心を喚起する工夫などもしている。本を読む習慣がない方々に働きかける難しさを感じるころだが、今後も効果的な方策については考えていきたい。

議 長 今の話も、どこまで働きかけたらいいのか非常に悩ましいと思う。先ほど榴岡図書館長と話したが、今週末、生涯学習支援センターのイベントに出張するというので、実際に皆さん方はチャンスを生かしながら活動されているのではないかと感じた。具体的にどのような形で参加するのか。

事務局 今回は父親向けの子育てイベントになるが、榴岡図書館としては会場の後方に本を展示して参加させていただく予定となっている。

小林直之委員 14 ページの方向性3「電子図書館等オンラインサービスの推進」について、とても丁寧に行っていると思う。令和3年度から始まった比較的新しい事業だと思うが、電子書籍、電子図書館のサービスを継続的に行っていると感じた。電子図書館サービスについて、大きな目的としては、非来館型サービスであるという考え方だと思う。単なるDXの一環ということではなく、図書館になかなかお越しただけでない方にも図書館のコンテンツを届けるサービスの一つと捉えることは非常に大事だと思う。

それから17 ページの方向性4「電子図書館の特色あるコンテンツづくり」について、こちらも大変面白いところだと思う。電子図書館サービスは小説などの読み物もあるが、ご承知のとおり、市場でいうと電子書籍の市場の9割はコミックになっている。読み物として電子書籍を利用する方はなかなか増えていない現状がある。そういった中で公共図書館が電子図書館のサービスを行うとしたら、データベース化の方に力を入れていくのは一つの在り方だと思う。郷土資料に震災資料を新たに加えているということだが、ぜひ可能であれば過去の資料も積極的に電子化していき、電子図書館サービスの中で仙台市の過去の資料も読めるようになると、よりデータベース化も進み、新しい利用者の開拓が期待できるので、検討いただければと思う。

議 長 今のご意見に対して、事務局から何かあるか。

事務局 電子図書館については、非来館型サービスとして、なかなか図書館に足をお運びいただくのが難しいという方々に、家にいながらにして本を楽しめるというところを一つの大きな狙いとしている。データベース化についても、レファレンスを頻繁に利用される方々は、過去の仙台、あるいは自分の生まれ育った地域、自分の先祖についてなど関心を持つ方がかなり多いと感じている。過去の資料に関しては、幅広く関心があるころだと思う。電子化するに当たっては、著作権のハードルなど様々あるが、条件がクリア

できるものに関しては電子化してデータベースを充実させるということも市民サービスの充実が大きくなるものと考えてるので検討してまいりたい。

渡辺祥子委員 本当に細やかで様々なアプローチで、場としての図書館の役割を最大限に市民に活用してもらおうという取組みが本当に素晴らしいと思う。この事業報告書についての意見と、委員の皆さんが発言された意見と混ざってしまうが、私の全体的なイメージをお伝えしたい。18 ページの方向性4「地域人材の育成と活躍の場の提供、市民参加の促進」について、協力をしてくださる市民の方々の育成に力を入れているが、ゆくゆくはこの図書館という場の良さ、本を通した図書館的「場」を各エリア、地域に創出できるというと思う。

韓国では、例えばアナウンサー夫婦がやっている書店、ディレクターがやっている書店、お医者さんがやっている書店など独立系の書店が注目を集めていて、その人が選ぶ専門的な本を目指してお客さんが集まっている。例えば猫だけの本の本屋さんがあって、そこに集まった人たちがコミュニティをつくっているということを考えると、先ほど児玉委員がコミュニティの場ということを話されたが、私たちが本をもっと読んでもらいたいと言っている価値が本にはあると思う。今は難しいと思うが、図書館の役割として、本を通した図書館的「場」を地域につくれたらと思う。図書館に行かなくても地域にもそういった「場」があれば、そこで、図書館が今一生懸命やっているノウハウがとて活かされるような気がする。

議長 図書館が市民をエンパワーメントすることができるようになれば、だんだん図書館もその役割のハードルが高くなってくる。それができれば、図書館が取り組んでいることに市民が影響を受けて、市民が自立していき、そのような方たちを図書館が応援するというサイクルにもつながるかもしれない。図書館が旗を揚げるのではないが、結果的に市民が自立していく活動になっていけばいい。また、広報という面では、行政の広報に勝るものはないので、そういう方たちをもっと応援してあげられるような取組みを市例で行い、行政と市民をつないでいくような役割が図書館には求められると思う。

杉山秀子委員 以前、大崎市の図書館に行ったときに、鳴子方面から来るとなると距離があるため気軽に図書館に行けず、図書館に行くのは年中行事の一つのようになるというお話を伺ったことがある。そうすると、図書館が外へ出て行かないといけないのかなと思う。例えば、先ほどの乳幼児施設などでは、確かに保育士はお話を読んで聞かせるが、施設によって、絵本や紙芝居に対する思いはものすごく温度差があり、積極的なところとそうでないところの違いが大きい。図書館の方が乳幼児施設に出向いて、子どもたちにこんな本があるよとか、保育園や幼稚園にある本を活用して読み聞かせするとか、外部から新しい風を吹き込んでいただくだけで、子どもたちの本に対する見方が変わってくるのかなと思う。

それから、18 ページの「読み聞かせボランティア基礎講座」は自分も講師として加わっているが、初めての方たちを対象にした読み聞かせのボランティア講座を長年開催してくださり、本当に裾野が広がってきたと思う。「読み聞かせボランティアステップアップ講座」の方は、仙台市図書館の職員が講師をしているのか。

事務局
杉山秀子委員

講師は職員ではなく、ボランティアとして長年活動されている方をお願いしている。私もボランティアをしているので、知識のある方たちを講師として呼んでいただけるのはありがたいが、本に対する知識を高めるときに、ぜひ図書館の方の話をそこに組み入れていただくような図書館側のサポートがあるととてもありがたいと思っていた。

先日、新しく市民図書館の職員になったという方がこの読み聞かせの講座を受講してくれた。受講したことで図書館職員としてのスキルもどんどん高まっていくと思う。初めて図書館に配属されたとき、必要な研修はもちろん十分行っていると思うが、特に子どもの本に関しては、本の知識はたくさんあっても読み聞かせの経験が乏しいと、どのように扱ったらいいか本当にやってみないと分からないと思う。そういうところをボランティアと一緒に図書館の職員の方がノウハウをまとめていただくと、高橋委員が話された子どもたちの施設に出向くことも可能になり、地域のイベントのときに、図書館が本を置くだけではない、様々な交流ができるようになると思う。本を置くだけでなくプラスアルファの働きかけということをもっとやれたらいい。そういうことをぜひ考えていただけると、ボランティアをしている身としてはうれしく思う。

齋藤千里委員

改めてこれだけの取組みを図書館で行っているということに興味深く読ませてもらった。自分が参加したものと、実際に一緒に行っていることに関して話をしたい。まず、18ページの「各種ボランティア養成講座等の実施」に関してだが、この中の「乳児向け読み聞かせボランティア養成講座」に参加した。実際に、宮城野図書館の「おはなし会」に参加して、とても楽しい思いをさせていただいた。このような機会が増えるとボランティアも育っていくと思うので、ぜひこれからも企画していただきたいと思う。

それから、「ブックトークボランティア基礎講座」について、私が所属しているブックトークボランティア「ランプ」は、この基礎講座を受講してから「ランプ」に入会するというシステムになっている。私は2010年に受講した第1期生だが、もう10年以上続いている講座の一つで、関連としては11ページの一番上、「ボランティアによる小中学校、児童館へのブックトーク利用」につながってくる。図書館では市立全小学校の4年生を対象にブックトークを実施しているが、それ以外の学年は私たちに要請があり、依頼があった小・中学校で毎年ブックトークを行っている。図書館と連携しているこのようなシステムが全国的にも非常に珍しいということを実は今年まで知らなかった。7月末に「子どもの本棚」という月刊誌を発行している「日本子どもの本研究会」が主催する全国大会に呼ばれ、講座の講師として話をしてきた。教員や学校図書館の司書など様々な方が参加していたが、公共図書館とボランティアが連携しているというのは本当に珍しいケースだと皆さんびっくりされて、仙台市の図書館はすごいねということを言われた。感想の中には仙台市の小中学生がうらやましいという非常にうれしい感想もあった。自分たちはあまり今まで意識しないで活動していたが、図書館との連携は本当に珍しいことだと分かったので、実は仙台市の図書館はすごいということぜひ皆さんに知っていただきたいと思った。

連携していく上で、かつては私たちも図書館とうまくいかなかった時期もあったが、今はお互いにいい関係にある。例えば、貸出しの本を30冊ほど学校に持っていく際、最

初は自分たちで運んでいたが、本は重いので一度自宅に持ち帰って、学校に持っていくことが本当に大変だった。また、もし自分の身に何かあったときにその本を持っていけなくなるので、自宅に持ち帰ることもかなりのプレッシャーだった。学校からは返却が大変なので貸出した本を持ってこないでくださいと断られていたこともあった。しかし、今は配送業者が運んでくれるので、学校も返却が楽になり、子どもたちに本を読んでもらうというのがとてもいい感じで進んでいる。図書館に感謝したいということでお話をさせていただいた。

議 長 いいお話を伺えた。それでは、これに対して何かあるか。

副 会 長 皆さんから貴重なご意見をたくさんいただいた。読み聞かせボランティアが仙台で非常に有効に機能しているということで思ったこととして、〇〇図書館ファンクラブのようなものをつくって、読み聞かせ以外にも企画、展示、ワークショップをボランティアにお任せするような活動の場をつくるのはどうか。要するに指定管理館を増やすという発想の延長線上に多分あると思うが、民間活用のような感じで、図書館をよく利用し、図書館が大好きな人たちに企画をお願いします。図書館職員がそれらの作業に注力しなくとも、この方々がこの図書館の蔵書を使えばどんな企画ができそうかといったことを考えてくれる。そういうファンクラブをつくってみるといいかなと思った。

議 長 それでは、事業報告書については、委員の皆様の意見を取りまとめて、次回協議会11月頃までに公表となる。取りまとめについては、事務局と会長、副会長にご一任いただくことでお願いしたい。

6 その他

参考資料・配付チラシの説明

次回協議会の案内

7 閉会